

## 戦中・戦後の直江津での生活

高原 重久（昭和 14 年生まれ）

私は、戦中・戦後を直江津で過ごしました。当時の出来事を伝えます。

### 【戦時中の出来事】

空からの攻撃のおそれがあるときはサイレンが鳴り、警防団の方々がメガホンで「空襲警報発令」と町中を駆け巡っていた。「空襲警報」が発せられると、防空壕へ避難しなければならなかった。当時は、ハンドマイクなんてものはなかった。

夜間も同様で、空襲警報が発せられると「灯火管制」といって、家などの明かりを消す必要があり、電気の明かりの漏れには厳しかった。タバコの火のあかりにも、厳しく注意された。

生活は、配給制度により厳しく管理されていた。電気会社（今の東北電力）に切れた電球を持っていくと無料で取換えてくれたが、電気の供給も厳しく管理され、電気は朝 8 時頃から夕方 5 時頃まで配電はなかった。

昭和 20 年頃にはタバコも制限され、近所のタバコ店に朝 7 時頃から並んで買っていた。刻みタバコが多かった。1 件目が売り切れると別のタバコ店に走って並んだ。1 件目は荒川橋の手前、角の「からつや」と言う雑貨小間物店。2 件目は中島町（現 天王町）の映画館隣の「金井タバコ店」だった。祖父が喫煙者だったので、終戦まで続いたが、祖父の体調が悪くなり、戦後は買いに行くことはなかった。

昭和 19 年頃、国からの金属供出命令により、荒川橋の欄干<sup>らんかん</sup>の手すりが壊され、中の鉄筋を取り出し、供出に当てていた。ただ、この事実が記載された資料はなく、終戦後に荒川橋が修理されたことは、記録されているそうである。

当時、直江津でも「建物疎開」が行われた。建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐためにあらかじめ建物を壊して空間を作ることで、直江津郵便局も空襲の被害に遭う危険性があるため、道を挟んだ隣の家が建物疎開の対象となり取り壊され、終戦までは空き地となっていた。向かいのお茶屋さんも対象になっていたようだが、拒否したそうである。

## 【戦後の出来事】

終戦後、大型の航空機が家の中にも聞こえるくらいの超低空飛行で飛来し、笛の「ピー」と言う音が鳴ると、飛行機の胴体が観音開きで開き、中から直江津捕虜収容所の近くの荒川橋あたり目掛けて落下傘（パラシュート）に援助物資の入ったドラム缶が投下され、荒川（関川）に落ちたところを外国人兵が拾い上げていた。当時、荒川はきれいで、橋の上から泳いでいる魚が見えた。

拾い上げた落下傘はぬれていたもので、当時の第四銀行向かいの岩崎タマリヤの2階建て（一部地下もあったと記憶しているが）、蔵作りの2階の何箇所かある窓から吊るすように干していた。落下傘の布は、空色やピンク、黄色など中間色で絹のように意外にうすくツヤがあったように思う。乾いた落下傘はその後、どのように始末されたかは分からない。

直江津捕虜収容所で働いていた何名かの職員が、捕虜を虐待したとして処刑対象となった。その中で本間さんという方が当時、食糧難の中でごぼうを食事に提供したことが、食習慣の違いから、木の根っこをたべさせられ虐待を受けたとして処刑対象とされたが、これは善意であったことが理解されて処刑を免れたそうだ。

年月日は不明であるが、岩崎タマリヤと池上理髪店の間の空き地にドラム缶2本くらい並べたような薄い黄土色の機雷が2本置いてあり、その上で遊んでいた。信管が抜いてあったとかなかったとか定かでないが、後に海で爆破処理されたので、今思うと怖い話である。